



ハピメア・アンサートゥン

Happy nightMare・uncertain

森崎亮人 著

ハピメア REGRET END & クリミナルボーダー  
W 予約キャンペーン特典・SS 文庫小説

---

『ハピメア・アンサートゥン』

Happy nightMare - uncertain

---

森崎亮人 著

【01／もりのなか】

薄暗い森の中を、わたしは歩いてきた。

まだ昼間なのに森の中は夕暮れに夕立が来た時より暗くて、でも夜よりは明るい。

道路みたいに平らじゃなくて、土や石がごつごつした地面は歩きにくいし、落ち葉のせいで気をつけても足をひねりそうになる。

「雨はやんだみたいだけど」

地面がぐしょぐしょになって歩きにくい。靴も靴下もとつくにべちゃべちゃになってる。

靴の中は火傷をしているみたいに痛くて熱いし、木の枝や根っこ、石のせいで足も傷だらけだ。

それに雨は上がったけど、霧が出てしまったのでさえ暗いのに余計に周りが見えない。

今どこにいるのか分からない。歩いているけれど、このまま森から出られるのかどうかも分からない。

それでもわたしは。

わたしたちは、立ち止まって誰かがくるのを待つのではなくて、森の外に出ようと歩き続けていた。

『ちょっと弥生に相談したいことがあるんだけど、時間ある？ 出来ればみんなには内緒で』  
弥生の下に、そんなメッセージが有子から送られてきた。

翠京学園の卒業後、家族とともに英国に引越し、日本を離れた弥生だったが、入学先の学校の交換留学生に選ばれ、一人日本に帰ってきていた。

ルートウィツジ家の家族は好きだが、日本の友人達とは離れがたかった弥生と、大学側としても本命の留学生（女子）が日本に不慣れな為サポートを期待した利害の一致を上手く利用した形だが、それはともかくそういった経緯で日本に戻り一人暮らしを始めたものの、透は有子と半同棲状態で行き場をなくした景子が部屋に入り浸っており、こっちもこっちで半同棲みたいになっているのだが今日は諸事情から一人でいた

「あたしが人様にあれこれ言うのもどうかと思うんだけど、弥生ってこんなだったっけ？」

そして数十分後。その弥生の部屋にやってきた有子が部屋の様子を見て渋い顔をしていた。

「最近ちょっとヤなことがあったから。しょうがないことなのよ」

今の弥生は、見た目も含め透と初めて会った頃のような様子になっていた。

久々に髪を黒く染め、外行きに演じていた仮面は外してやさぐれた目つきをそのままに。今も楽な緩いブラと前を開きっぱなしのシャツ、緩すぎる短パン姿であぐらをかいていた。

そして台所には強めの酒の空き缶が積まれていて、ここ数日でどれだけ飲んだのかと有子は不安になる。

ちなみに空き缶はすべて軽く水洗いされているが、それは先日来た景子が一通り片付けたからで、それまでの数日間は、この部屋はとても人を呼べるような状態ではなくなっていた。

「んで、相談って何なの？」

「え、あー、うん。いや、その前に大丈夫？　ほんとにこのまま相談しても平気？」

そう有子が聞くと、弥生の表情が一気に渋くなる。こういう顔や雰囲気は、悪夢続きでやられている時の透に似ているあの二人がある意味で似たもの同士だったなと再度実感する。

「むしろ自分自身の現実を忘れる為に、自分以外の話を聞きたいわ」

「あ、はい。そういう意味ならちょうどいい感じの相談だと思うけど」

そのしゃべり方に、まだ若干アルコールの残っている弥生だがピンと来た。というより、普段の弥生ならもう少し早く違和感に気づいていただろう。

「ちょっと待って。もしかしてなんだけど……ユーコじゃない？」

「あはは、正解ー。はいどーも、お久しぶりです。有栖です、相談したいのもそういうことでして……」

そう言つて有子の顔、有子の体だが確かに有栖が困ったように笑う。そしてそれが有子の演技やイタズラではない様子に、弥生の目が細くなる。

「何があったのよ。今まで『有子』の体で有栖が出張ってきたことなんて無かったでしょ？」

「だよー。あたしも体が有子なのに弥生としゃべってるのがなんか変な感じなんだけど」

なるほど緊急事態だ。そしてみんなに内緒と言ったのも分かる。

「一応聞いておくけど、私以外には話した？」

「まだ弥生にしか話してないんだよねー。ホントはあたしが出張ってるなんて誰にも話さないでどうにかしたかったんだけど、どうにもなんなくて。それで、まあ悪いんだけど弥生が一番相談しやすかったから、相

談しに来ただけ、ど——」

まさかビールとワインの中で沈んでいるとは思わなかった。

「こっちの理由はまあ後で話すけど、まずはそっちから聞くわ。というか聞かせなさい、現実逃避させて」

「あ、はい。というわけで、今言った通り、なんか有子が起きなくなっちゃって代わりにあたしが出てくるはめになっちゃったんだけど」

「……何年かこっち留守にしてたけど、その間に似たようなことはあったの？」

「覚えてる限りは無いかなー。まあ、有子があたしっぽくなっただこはあるっていうか、こんなはつきり『別々』だって起きてる間に意識したことは無かったんだよね」

有子と有栖の関係は弥生も良く分かって無い。というより、おそらく有子と有栖自身も、透も、他の誰もきちんと分かってはいない。

ただ少なくとも「あの夢の世界」以外で有栖が姿を現したことはないし、こうして有子の体で有栖としてしゃべる、なんてことは無かった。

「え。これもしかして私、飲み過ぎて夢と現実の区別がついてないやつ？」

「あはは、その可能性はあるかもしれないけどねー。それなら別に良いんだけど。そもそも今が夢なのか現実なのか確かめられないからねー」

少なくとも弥生は今を「現実」だと認識しているし、目の前で困った顔をしている有子の体の有栖も同じだろう。まあ主観はあてにはならない。

「……しようがないわねー。とりあえずアリスが分かっていること話してくれる？　なんかツール達に言えない事情もあるんでしょう？」

「そうなんだよねー。有子が起きないっていうか、変な夢を見ててそこから抜け出せてないみたいで。これ

「ただだったらまあ、とっとと起きろー、早く起きないとあたしが透といろいろしちゃうぞーで済むんだけど」

「襲う前にちゃんと透に自分はアリスの方だって言ってから襲いなさいよ……?」

いろいろする方は止めないんだ、と思う有栖の前で弥生は脳を動かす為、ブドウ糖に手を伸ばす。甘いものは苦手だけれど、研究室生活ですっかり癖になっていた。

「ホントにする時は言うけど、そんなこと言ってる場合でもなくてすね?」

「そうね。なんか有子が起きない、なんて最初にトールに言ってる話なのになんで私の所に来たの?」

「あー、それがですねー……有子の見てる夢がね、暗い森で迷って出られない夢なんだよね?」

「……なるほど。それはトールにも言えないし、咲ちゃんにも言えないわね」

「うん。だから相談するなら弥生と景子なんだけど、景子ってこういう話あんまり得意じゃないからね。弥生の方に先に連絡しました」

「はいはい、納得したわ。とはいえ私に出来るのも相談相手になるくらいだけ。ホントにどうにもならなくなったらアリスがこっち来てるみたいに私やトールがそっち行くだろうし。……とはいえ、それでトールに森で迷う夢を見る前にどうにか出来ればしたいわよね」

「そういう訳です。透には、なんであたしが出張ってるのかも出来れば話したくないところです」

「アリスじゃ誤魔化しきれないものね。あれ、というかあのお茶会の部屋に行く方の夢って、そっちはまだ見てるの?」

「全然。いや、見てるかもしれないけど覚えてないから、見てないんじゃないかなーくらいの話だけ」

「わたしがこっち戻ってくるまでにあれこれあった訳ではない、と。まあ、これがアリスじゃなくてユーコが変な夢見るって話なら、絵本書いてるせいでしょって言ってお酒飲ませて終わりだったんだけど」

「いや、お酒はまだっていうか多分これからもダメだと思うから、飲ませないでおいで？ 前より吐かなくはなっただけ」

「冗談よ冗談。というかそもそも、なんで有子が森の夢見てるのよ、まずそこがおかしいでしょ」

「そうなんだよねー。しかも『見てる』んじゃないかって『一緒に迷ってる』からどうすればいいか分からなくて」

「……それって、マイアの立場でしょ？」

「うん。『あたし達』は透がどういう夢を見続けてきたのは、知ってるよ？ あたしは有子だし、有子はあつただけど——舞亜だったことは、絶対に無い」

有栖ははつきりと言いつつ切った。

あの夢の舞亜の正体は分からないけれども、少なくとも「有子側」の存在ではないと弥生も思っていた。それにそもそも、有子が「舞亜の立場で夢を見る」理由が——無い訳ではないが。

少なくとも有栖が出張ってくる程の理由は思い当たらない。

「そもそも、多分。『透の見てる森の夢』ともちょっと違うんだよね？」

「……あの夜の森の夢じゃないの？」

こくり、と有栖はうなずき自分の見た夢の内容を弥生に語った——。

【03／もりのなか】

歩いてても歩いてても、森の中から出られなかった。

おなかもすいたし、喉も渴いた。

足も痛いし、さつき転んだ時に顔も地面にぶつけて口の中が血の味でいっぱいになってる。でも唾と一緒に吐き出すのも「もったいない」から、我慢して飲み込むくらいだった。

「かえりみち、どっちだろうね……」

今、手をついた木が見たことのあるものに見えて思わず口に出してしまった。

さつきから同じところをぐるぐる回ってるだけかもしれない。まっすぐ歩いてるつもりで、全然まっすぐじゃないのかもしれない。

そもそも、そんなに歩いてないのかもしれない。今どのくらい歩いたのかも分からない。

「多分、こっちであつてると思うんだけど」

わたしと一緒に歩いてきた男の子が、動かないわたしを振り返ってそう言った後に、上を指さした。

「ずっと、お日様のある方に歩いてるから。大丈夫だと思う」

「そう、だよね」

そうだ。ずっと「お日様が沈む方」に向かって歩いてる。それならぐるぐる迷わないはずだった。

「それに、えっと。まだ、日が暮れてないから」

「そう、だよね」

だから、歩いていたとしても何時間か。少なくとも、夜にはなっていない。

だから、大丈夫。

疲れてるけど、気分の問題。

そう言い聞かせて、私たちはまた歩き出した。

【4／弥生・B・ルートウィッジ】

「男の子がいる。だけど一緒に歩いているのが誰か分からない？ トールじゃないの？」

「透……だど、思うんだけど。いや、顔は似てるんだけどあたしそもそも子供の頃の透を見たことないから」

あー、と弥生は昨日まではワインを入れてたマグに、今日はブラックコーヒーを入れてすすする。

「そういや私も話でしか聞いてないわね。でも子供の頃に咲ちゃんに引っぱたかれたとか言ってなかった？ その時の夢って見てないの？」

「いや、見てないよ。少なくとも『あたし』は知らない。その有栖に頭使うのを期待してもしょうがないかみたいな顔はやめて！？」

「それは時々思ってたけど、今のはそういうのじゃなくて。ユーコが見てるのはトールの『悪い夢』じゃないかって分かれば一歩前進な訳よね？」

「それは、まあ。そうかも？ それきっかけて、何か変わるかもしれないっていうのはある気がする？」  
ふわふわしてるな、と思いつつ弥生はスマホを取り出す。

「じゃ、咲ちゃんに聞きましょう。子供の頃のトールの写真くらい家にあるでしょ」  
「あるだろうけど、咲ちゃんにその頃の話聞くのちよつと悪い気がするなあ……」

「私だってやりたくは無いけど。それが嫌ならユーコを叩き起こしなさい——」  
「起きろー、起きないと透にも話さないとならないから起きて……むむむむ！ あれ、どしたの？」

そんな有栖を見て、弥生が手を止める。

「えっと。ほら、ユーコが起きたら、アリスはどうなるのかしらって。別にこのままでもアリスとしては良いんじゃないの？」

「え、全然良く無いよ？ だってこれ有子の体だし。すぐ息がきれるし、吐きそうになるし、目は悪いし、頭も重いし、胸も重いっていか力弱いし、座ると立ち上がるのも辛いし。返せるなら早く返したいです」

「あ、うん。まあアリスが納得してるならユーコを起こすのに遠慮しなくていいのね」

「いいよー。そもそもあたしも本意？ ってヤツなんで。チャンスだ乗っ取れラッキーとか、そういう感じは全然ないです」

「ならいいか。文字通り寝てる子を起こす必要も無い、いや今は寝てる子を起こさないとならないのだけどと弥生は自分の脳内で一人思いながら咲に連絡をとった。

『写真を持ってそっちに行きます。あと見せる前に、本当に有栖さんかどうか確認させて下さい』

「……えーと、咲ちゃん怒ってる？」

咲からのメールの返事に、有栖が恐る恐る聞く。

「私とアリスへの信用が無いというより、非常事態の確認が先って感じだと思うから……セーフ！」

弥生と有栖という組み合わせに、地味に信用が無い部分は否定しなかった。というわけで咲が弥生の部屋に来るまで少し時間が出来てしまった。

有栖は普段ならともかく、有子の体で座って休んでしまっただけで立ち上がる気になれないまま、出されたミネラルウォーターをちびちび飲んでた。

アルコールやカフェインが入っていないチョコイスな辺り、弥生はその辺りが分かっている。

その弥生はブドウ糖ですっかり甘くなつた口をどうにかするため、コーヒーの二杯目に入っているが。

「えっと。ところで弥生の方は何があったの？ 相談乗って貰ってるし、愚痴とかなら聞くけど」

「あーそうねー。そう言ってくれるなら愚痴ろうかしら。アリスならちようど良いし、適当に聞き流して欲しいんだけど」

「うんうん。あたしは有子が起きたらまた寝ちゃうしねー。旅の恥はおいてくみたいなそういう感じでどうぞどうぞ」

逆に弥生がここまで言うということは、有子は吐きそうになるだろうし、他の面子は心配しすぎるレベルの話だろうと有栖は分かる。自分も心配はするだろうけれど、言った通りその後何か出来る訳でもない。

そして弥生はコーヒーを一口飲んで、一息吐いてから口を開く。

「大変不本意ながら血のつながってる方の母親が、ルートウィツジ家に連絡をとってきてね？」

「お、おお……。予想してなかった方から来た。……。それで？」

「再婚してるのか、男ひっかけたのか、ひっかかったのか、知らない男と暮らしてるみたいで。まあ恥が無いのは確かだけど。金の無心をしてきてたのよ。ふふふふ……」

弥生の目から生気が失われていく。その様子を目の当たりにすれば有子なら軽くマライオンコースだろう。今はメンタルが有栖だから耐えられた。

「遣伝子上、親譲りの髪の色を鏡で見て、気づいたら染めてたわ……。久々にやったけど、染め方とか覚えてるものね」

「ああ、なるほど。それで……」

「まあそこから、ついうっかりずっと飲んじゃって、昨日ケーコが来るまで部屋がすごいことになってたみたいけど」

「みたいって」

「正直良く覚えてないわ。いや、大体は覚えてるんだけど。ケーコが文句も言わないで掃除して帰っていったのは本当のことなのか、お酒が見せた幻覚なのかは分からないわ……！」

「あ、あー、そこは……どうだろう？」

普段なら「飲み過ぎるな」くらいのこととは言うだろうけれど、さすがの景子も自重した可能性が無くもない。無いけれど、泥酔した弥生が聞き流した可能性もかなりある。

ただ、景子が部屋を掃除したことや、水や軽く食べられるものを用意していったのは確かだった。

「弥生、大変だったね……。いや、これから大変なの、かも？」

「そうね。なんか父さん達に『弥生の妹ができるかも』みたいな断りづらい感じでお金貸してとか言ってきたみたいだし。まあ返す気無いでしょうけど」

メンタルは有栖でもボデイが有子なので、胃がキリキリしてきた。

「というわけで！ アリス、ちょうど良い時に来たわ！ なんならちよつと久々にあの夢の部屋出してくれてもいいのよ。大丈夫、ある程度したらちゃんと帰るから！」

「出してって言われて出せるようなものじゃないというか。そもそも行けたとしても、ちゃんと帰れる？」

「多分」

帰る気はあるけど、万が一帰らない可能性のある自覚がある返事だった。

そして少しして、咲がやってきたのだけだ。

「——平坂さんが心配してましたよ。お酒は飲むなどは言いませんけど、体を壊さない程度にして下さいね」

まずはじめに、仕方なさそうにそう言った。

「あ、咲ちゃんってお酒に逃げるのはダメとは言わないんだ」

「人に迷惑をかけすぎるようなら、もう少し厳しく言いますけど、今回は事情があるみたいですしね。それに、わたしが長い間、誰の妹をやったと思ってます？ この位は別に気にしませんよ」

咲は完璧に冗談のつもりで言うけれども、有栖と弥生は咲の懐の広さを再実感して納得と共に真顔で唾を飲んでしまう。

「あ、うん。大丈夫、お酒に溺れて逃げません。いや、たまに逃げるだろうけど折り合いはつけるようにするわ」

現実から逃げ続けるとどうなるか。弥生は「もしもの自分」のことを覚えているし、咲と透の顛末も「大体知っている」のもあってそう答えていた。

「そうして下さい。頼れることがあれば、頼ってくれてもかまいませんから」

「あたし達って年上になる程、頼りがいが無くなっていくよね……」

「アリス、そういう否定できない事実を言葉にしなくてもいいのよ……？」

弥生が死んだ目をしながら有栖からも目をそらす。

そんな二人をよそに、咲は表紙が布張りのアルバムを肩からかけたバッグから取り出す。

「はい、わたし達の小さい頃のアルバムです。汚さないで下さいね？」

弥生はコーヒーマグを離れたサイドテーブルに置くが、咲は有栖の方を見ていた。

「あ、あたしだってそのくらい分かってます！ こいつ、アルバムの上でお菓子食べてぼろぼろこぼしそしてみたいな目で見ないでっ」

「一応信じてますけど、念のためですよ」

それはあまり信じてないやつなのでは？ と弥生は思ったが口には出さない。

そして咲の主導でアルバムを開き、二人がのぞき込む。

「お、おとお。ほんとに透と咲ちゃんと舞亜がちっちゃいまま並んでる……」

「はあー。今もだけど、二人とも小さい時から美少女だね……。こんな妹と幼なじみがいたらツールが美人相手にするの慣れるのも分かるんだ、ど——」

「分かるんだけど、何ですか？」

「いや、舞亜がいるってことはまだ元気な頃でしょ。顔色がいいツールに若干の違和感があるわね……」

「言いたいことは分かりますけど。有栖さん？」

子供の頃の写真の透を凝視している有栖だが、渋い顔になっていた。

「……有子が見てる夢、森の中で一緒に迷ってる男の子。似てるけど、透じゃない」

男の子の名前は「はすのりん」というらしい。

「女の子みたいな名前だし、あまり好きじゃないけど」

わたしは、そうでもないと思ったけれど本人が気に入ってないなら仕方ないと思う。

「お母さんは、僕が生まれた時に産がきれいだったとか、この名前は光って、道案内をしてくれるとか、そういう意味だしんですけど」

「きれいな意味だと思うけど？」

そういうと、男の子は少し不機嫌そうな顔をする。

「でも、りんって人魂みたいな意味もあるんだって。なんだか、そっちの方が『じっくりきて』イヤなんだ」

そういいながら、森の中を歩く。

「……わたしは、君がこの森から連れ出してくれたら、その名前の通りで良かったって思うけど」

「……そうだね、その通りだと思うよ」

わたしは分かってしまった。

今、ここで不安になるようなことを言ったら、もう歩けなくなるんじゃないか。そう思っこの男の子は言わなかったことばがある。

『燐』。

人魂みたいとか、光るってことは多分この漢字だと思う。ちょっと理科とか好きなわたしはそれを知っていた。

昔話に出てくるマッチの材料とかで……死んだ生き物の体から出る光の元。

ここでわたしたちが死んで「人魂」になったら、ぴったりだ。なんて皮肉を黙ったのかもしれないし、わたしが勝手にそう思ってしまっただけかもしれない。

すくなくとも、男の子は言わなかった。

——そうなってしまいかも、しれないのよね。

「——蓮乃燐？」

有栖が「思い出した」夢の話聞いた咲だが、その反応はきよんとしたものだつた。

「その名前に覚えは無い？ ……咲ちゃん？」

「いや、ええと。前に見た夢の、話とかそういうのになるんですけど」

「あたしがいる時点で、もう今日はずっと夢の話だから大丈夫」

何が大丈夫なのか、と思いつつ咲は口を開く。

「……あの夢の中で、わたしが透ちちゃんと恋人同士になった夢もあったじゃない？ その時に……もし、子供が出来たらどんな名前をつけるか、なんて話したことがあって」

咲は照れというよりも、不思議そうにその話をする。

「でも私も今言われるまで忘れてたし、これが本当にその夢の記憶なのか、自信は無いです」

「少なくとも、蓮乃のおうちにそういう名前の子はいないし、実はお父さんがとかそういう訳でもない、と」

咲はこくりとうなずく。

「あー、えーっと。弥生？ つまり？ 前に見てた『もしも』の夢の一つ、みたいなことでいいの？」

これを有子が言っているなら『最近絵本とか書いてるし、その思考パターンや連想先が記憶の引き出しとつながって夢で見ただけでしょ？』なんて言っていただろうと弥生は思う。

しかしここに有栖が表に出ることと、かつて巻き込まれた「同じ夢を見た」という経験が、もう少しオ

カルトの方面に意識を踏み込ませていたし、何より普通の考え方は「有子を起こすキー」になりそうな手がかりとして正しいのかどうか――。

「ちよっと考えるから待って。その夢の話とか、もうちよっと詳しく出来る？　なんか有栖視点で確認したいこととか。そもそもそのリンはツールではないのね？」

「そうだねー。ただ、こうやって写真見ると……なんか、咲ちゃんにも……似てるような気がするから、二人の子供って言われるとそうかもって思う？」

「それならなんで、わたしと透ちゃんの子供と、有子さんが森で迷子になってるんですか？」

そう言われて、有栖が「忘れていた夢」を思い出す。

「いや、あれは……やっぱ、有子でもあたしでも、無いとおもう。男の子と同じくらいの歳だと思うし……」

「夢の中の自分が普段の自分じゃないっていうのはあり得るんだけど、有子と有栖の場合は『3人目』の疑いもあるのよね……」

「あるんですか？」

「だってもうアリスがいるし。とはいえ、現状ツールという彼氏もいて幸せなユーコに、ここで3人目が必要だとも思えないんだけど――」

咲は弥生の言っていることが、全部ではないが大体分かっていた。

「自分が幸せになれたから、そもそも最近是有栖さんに頼る必要も無かった。もし幸せでないなら、その時は『こうだったら幸せになれそう』という希望で有栖さんが生まれた、そういうことでいいんですよね？」

「多分そう。少なくともあの夢でアリスとマイアはそう言ってる。ユーコの自覚は知らないけど」

「あはは。言ったかもしんないし多分あつてるけど、実際のところはどうか自分でもよくわかってないん

だよねー」

「まあ、人はなぜ生まれるのか。なんてのは良く分かつて無いし、我思う故に我ありなんて言葉もあるし、むしろ分かっちゃうと、よほど自我が強くないかぎりメンタルのバランスがおかしくなると思うのよね？」

「自我が強いつて、舞亜ちゃんみたいに？」

「あーうん、舞亜は平気そう。でもそっかー、なんか全然違うのかなあ。まだ昼で明るいから、見える花とも透達の時と違うなーとか思ってたし」

そう言つて有栖は弥生のタブレットを使つて、自分の覚えている花はこれだと見せる。

「……つい最近、森の整備のついでに、この花は植え始めましたね。でも一角だけですから奥には広がってないはずだし、有子さんにも話してないと思います。透ちゃんも知つてるから、そこから伝わったかもしれないけど」

横での話を聞きたびに、弥生の表情が渋いものになつていくが、有栖はのんきな様子だった。

「有子？ が迷つてるのつて透達と同じ所だったら、帰つてきた時と同じことも出来るんじゃないかなー、とか思つてただけど」

「そうですね、それで『抜け出すにはこうすればいい』つて伝えたら有子さんの悪い夢も終わるんでしょうけど。透ちゃん、森から出た時のことを全然覚えてないみたいなんですよね」

そこは有栖も弥生も期待してなかつたようで「やっぱり」という顔になる。

「実際に出てきた時に、結局張り倒した後にわたしが押しかけ妹になつた訳ですけど——」

それを「しょうがないなあ」程度の温度で話せる咲のメンタルの強さに改めて弥生は出来の違ひを実感する。

「最近、その辺りも落ち着いたから。改めて聞いてみたことがあつたんです、強めに。でもやっぱり全然覚

えてないみたいでしたね」

「咲ちゃん、なんで強めに聞いたの？」

「舞亜ちゃんを探すためですけど」

「そうだ。透の「心」と決着はついたが、現実ではまだ何一つ見つかっていない。

「……やっぱり咲ちゃんはちゃんと現実見てるし、未来に向かってるわあー。過去が追いかけてきて、こんな風になってる私とは大違いねー、ふふふ」

「急いで染めたから、少しバサついている黒い髪の手を指で弄りながら、弥生がシニカルな笑みを浮かべる

「弥生、現実逃避しよ！ あたしを助けて！」

「そうね、今は現実逃避の時間だものね。というわけで、もうここからは予想とかオカルト部分の話になるんだけど——」

「弥生はそう前置きをして。」

「私達の見てきた夢って、大体『過去』のことか、あるいは『今』だったじゃない？ で、過去はみんな同じ、だってもう確定してることだから、基本的に変えられない——まあ、認識とか記録を変えて、そうだったかもしれない、みたいなことは出来るんだけど」

「有栖と咲は黙ってうなづく。弥生と透が時間を持て余している時にあのお茶会の部屋でこういう話をしていたな、と思うが二人は返事が出来るほど「思考遊び」になじみが無い。」

「で、その『今』はバラレル、枝分かれしてたのが沢山あったと思うのよ。現実ではツールはユーコのおっぱいを揉んでる訳だけど、そうじゃない場合もあったでしょ？ 咲ちゃんを押し倒したり」

「まあ、ありましたね。そうはなりませんでしたけど」

「しれっと言う咲に、有栖が相変わらず居心地悪そうに、姿勢を正す。」

「『今』『この世界』の私たちは振られた訳だけど、でも『横並びの別の今』には、透が咲ちゃんと子孫繁栄に励んでたり、根暗な金髪女やツンケンしたお嬢様のメンタルを支える場合もある、なんて予測は出来るよ。ただしお互い普通なら観測は出来ないのね。想像しか出来ない」

「弥生せんせい、前に夢で見たのはその観測にはならないんですかー？」

「なりませーん。あれは『今』から『未来』に対しての『予想』だから、平行世界の観測じゃないですー全然分かって無い有栖が？を浮かべて動かなくなる。」

「予測は天気予報で、私達が体験したのは多分シミュレート。まあ、個人的に『横並びのそれぞれ幸せな今』はあつて欲しいし、あると思うけど確かめる方法は無いわ」

「今回も、有子さんが似たようなことになってるんじゃないんですか？」

「まあ、概ねは同じだと思っただけど。これまでって私達ってなんだかんだで皆『私達のまま』だったでしょ？」

そこで透が有栖を見る。

「ああ、だから3人目。つまり、有栖さんの時と同じように有子さんが引きこもって、現実逃避してるんじゃないか、と」

「咲ちゃん、割と容赦ないよね……あたしもまさか、知らないうちに妹みたいなのが増えてたらどうしようって不安にはなってるけどさ」

「……：ツールとは喧嘩したりとか、そういうのは無いのよね？」

「二人つきりになったら普通にイチヤイチヤしてるし、喧嘩とかもないし、最近是有子もメンタル前向きになってたと思うけど？」

もう一人の自分が内通者なのは大変だなあ、と透は密かに同情するけれど、それはそれだ。

そして弥生はさつきから渋い顔を続けている。

「はい、ここでもう一つの可能性」。というか『過去』

『沢山の今』に続いて新しいカード『未来』を出します。というか今回コレじゃないって思ってる」  
弥生は興味と、出来ればそうでなくあつてくれ、という顔をしていた。

「それは、さつきの『横並びのシミュレート』とは違うんですか？」

理解の早い咲がそう聞くが、弥生は難しい顔のままだ。

「概ねは同じ、なんだけど。ただ、なんか、これまでと違うっていうか——」

弥生は「有子は二度と目を覚まさないのではないか」という可能性を考えていた。

過去は確定で変えられない。平行した今も、別の並びには手を出せない。『だから、結局今この現実』  
に帰ってこないとならない。

しかし未来は行くことが出来るし、何一つきちんと決まっていらない。

「かつて、自分も夢の女王だった」感覚がよみがえっているのか、泥酔状態からの現実逃避がキマつての  
思考なのかは自分でも定かではないが——。

弥生がそんな考えで思考が回り出した頃、もう一人訪ねてきた。

「ルートウィッツ先輩、今日はきちんと人間の言葉を話せてますか？ 蓮乃さん達にまで迷惑かけています  
んか？」

すっかりこの半居候となった景子が、合鍵で入ってくる。

口調も言葉の内容ほどとげとげしておらず、あきれつつも心配してるのが分かるし、その手にはこれから  
料理するだろう食材が下げられていた。

今日、ここに呼ばれたことはグループのメッセージで知っているし、景子も後からくるのは連絡していたけれど。

「ケーコ、チャイムくらいならしなさいよ——アリス？」

景子が顔を出した途端。

正座をしていた有栖が、そのまま意識を失うように眠りにつき横倒しに倒れた——。

わたしは、歩けなくなっていた。

大けがをした、とかじゃないけれど。泥と濡れた落ち葉に足を滑らせて倒れて、そのまま立ち上がれなかった。

置いて行つてと言つても、男の子は「それならここで、誰かが気づいてくれるのを待つ」とわたしの側で待っていた。

多分だけど、この子も疲れ切つてたんだと思う。

誰かに気づいて貰いたいなら、例えばどうにかして火をつけるとか。そういうことをした方が良いのは分かっているけど、もうその元氣も無く座り込んでる。

まだ明るい、そう言っていたのもさっきまでの話。

あつという間に日が暮れて、もう周りはほとんど見えない。

死んじゃうのかなとか、おなかすいたとか、そういうことを口にしたらそのまま動けなくなつてしまいうだから、言葉だけは飲み込んだ。

だけど、それ以上のことは出来なかった。

いろいろと、考えることはある。

——違う、今更になってやっと考えられるようになった。

「なんで、歩いてたんだろ……」

返事がない。

最初から、歩いていた。

でもどっちが森の外かなんて、分からなかった。

それなら、歩き回って疲れて、怪我をするよりも雨が当たらない木の所とか、どうやったら煙を出せるかとか。そういうことを考えれば良かったと今更になって思う。

違う。

「ねえ、キミは……どこから来たの？ どうして、森で迷ってるの」

「……そっちこそ」

わたし達は、それも分からない。

なんでここにいるのか。どうして迷っているのか。なぜ二人でいるのか。

気づけば、森の中を歩いて、迷っていた。

そして今は、たぶんきつと——。

それ以上考えると、涙が出そうになった時だった。

「——こんな所にいたのね」

知らない女の子の声が聞こえた。

うつむいていた顔を起こすと、やっぱり知らない女の子がたっていた。

細くてお人形さんみたいな女の子は、泥だらけのわたし達と違って綺麗な服で、綺麗な顔で、そして怖いくらいに冷たい笑顔を浮かべていた。

それはでも、暗いせいなのかもしれない。

その子は、隙間から差し込む月明かりの中に立っていて、それはまるでとても冷たくて、色がついてないみたいだった。

「間に合ってよかった。二人ともボロボロですり切れて、動かなくなってしまうような顔をしているもの」  
ちよつとだけ安心したような様子。だけどそれは、わたし達を、いや人を心配してるようには聞こえな

った。

面倒なことを押しつけられて、それがめっちゃくちやにならなくて良かった。そんな風に聞こえるわたしは疲れ切っているのかもしれない。

「……森から、出て帰れるのか？」

黙っていた男の子が立ち上がってそう聞くと、女の子はうなずいた。

「ええ、あなた達が帰りたくないって言っても連れて帰るつもりよ」

男の子は、嬉しそうには見えなかった。

それは本当は帰りたくない、という気持ちがあるのか。それともこの女の子のことが信じられないのか。

——わたしも、信じられない。

こんな森で、全然汚れてなくて、大人の人も連れてなくて、明かりも持っていないくて。

男の子だけに任せておけなくて、わたしも立ち上がる。怖いから。

そんなわたし達を見て、目を細める。そうすると口が笑っているのがますます怖くて、変な冷や汗が出てくる。

「ところで、キミは誰」

男の子がそう口にすると、少しだけ驚いたような顔をした。

「ああ、そうね。名前、そう名前。そのくらいは教えておかないと。名前を名乗らないような人について行つちやいけないものね？」

そう言っておかしそうに笑うと、ちょっとだけその子が「生きてる」感じがした。

「わたしの名前は、ええと——」

小さな口を開く。綺麗でかわいらしくて、なのに怖い笑顔で。

「ひらさか、平坂マリ。よろしくね？」

その名前を、わたしは——

「なんでその名前っ……!？ あれ、咲ちゃん……平坂さん？」

「あ、起きた」

『有子』が飛び起きると、咲と景子が安心した様子で胸をなで下ろした。

「……鳥海先輩、有子さんの方ですか？ それとも有栖さん？」

病院、あるいは透に連絡しようとするスマホを動かしていた手を止め景子が確認する。

「え、あうん。ボクだけ。あれ、なんで弥生の部屋にいる……なんで髪黒いの？」

「そこからか。それはいいとして、そっちは本当にちゃんと有子なのよね？ 自分のことは分かる？」

そう弥生が聞くと、有子は目をつむり自分の「今日のこと」を確かめるように意識を持っていく。

「えーと、うん。また何かあったみたい、っていうのは分かった。というかボクがさっきまで夢を見たのは、言われて気づいた」

弥生がしぐさで景子に「とりあえず透に連絡だけして」と伝える間、有子が言葉が続ける。

「森の、中で。なんか透と咲ちゃんに似た男の子と迷って、倒れて……もうダメだった所で、迎えに来てくれた女の子がいて……それで、目を覚まして」

そう言うと、目をあけて景子の方を見る。

「……平坂さん？」

「はい、そうですが。……そこで黙られても困るんですけど」

「あ、いや。ところで平坂さんは『マリちゃん』って親戚とか知り合いはいる？」

「はあ、マリですか。いえ、少なくとも知る範囲ではないと思います。少なくとも、ひいお爺さまから下にそういう名前の親族はいないかと」

「……ユーコ、そのマリちゃんって見た目は？」

「暗くて、ボクも目がかすんでて正直ちゃんと見えなかったんだけど」

明かりも月明かりだけだったし、まるで幽霊みただった、というイメージが先行する。

そして有子は透がないことを確認し、そして咲に申し訳なきように。

「……舞垂みたいだった。でもあんなに怖い舞垂は見たことが無い……ああいや、透抜ききの時の有栖に対してはあんな感じだったかもしれないけど」

その言葉に、弥生の方が渋い顔をする。

「弥生先輩、どういうことだと思えます？ 単に有さんが悪い夢を見て、透ちゃんみたいになりかけたから有栖さんが出てきてた、みたいなことでいいんですか？」

「え、有栖？」

一人、当事者なのに分かっていない有子と、来るなり倒れていた様子しか見てない景子が首をかしげる。

「まあ有子も自力で戻ってきたっばいし、気にしすぎなくてもいいと思うんだけど——」

「何か気づいたことがあるんですね？」

「いや、そうなんだけど。正直、二日酔いでトリップして思いついた幻覚の可能性がかなり高いんだけど」

それでも話せ、という3人の無言の圧に弥生が観念してため息をついて、その幻覚としか思えない言葉を口にした。

「きつき言った通り、未来の夢を見てたのよ」

「はっ……！？ 寝てた！」

「見りゃ分かるわ。おはようー、放課後に机で寝てるとか、お姉さんびっくりだわ」

夕日の差し込む教室で『鳥海アリア』が目を覚ますと、前の席の机に座ってスマホを弄る幼なじみが見下ろしてきていた。

「ところでフーちゃん、何してたの？」

「アリアの寝顔を動画で撮ってた。ずっとうなされててなかなか見所あったわよ」

そう言っで見せてくる動画を消させようと手を伸ばすけれど、フーちゃんと呼ばれた金髪の女子はきつとよける。

「んで、どしたの？ なに、また子供の頃みたいに悪い夢見てんの？ ほら、何度も何度も見てたってやっつ

「はい、そうです……。最近見て無かったんだけどなー——森の中で、知らない男の子とぐるぐる迷って、めちゃくちゃ怖い子に助けてもらう夢」

「ふーん。そんで男の子が咲ねーさんと同じ名字なんだっけ？」

「多分？ 蓮乃燐。まあ、わたしの夢にしか出てこない謎の少年な訳ですがー」

蓮乃咲は結婚していないし、養子もいない。

最近目の前にいる金髪の美少女が実質養子のようなものだが。

「あ、でも今日は新展開が2個あった！」

「アリアの夢は再放送した上に、リメイクまで入るのか。なかなか斬新な精神構造をしていらつしやる。で、新展開って？」

幼なじみの皮肉に慣れきっているアリアは、全く気にせず話を続ける。

「まず、助けてくれた女の子の名前がついに判明しました！ 平坂マリちゃんです！」

「平坂あ？ 景子姉さんも子供いないでしょ」

「……そうなんだよねえ？」

腕を組んで首をかしげるアリアだが、フーちゃんの方も全然真面目に考えている様子も無くスマホを弄り続けている。

「んで、もう一個の新展開って？ こんな話聞いてあげんのお優しいアタシだから聞いてあげる」

「ありがたやー。いや、なんかお母さん達が出てきまして。その森の中じゃなくて、わたし？ が森で迷ってる夢を、お母さんが見てたっばい？」

「……お母さんって有栖っさん？」

「そう、その有栖っさん。フーちゃんが咲おばさんとか景子おばさんをねーさんって呼ぶなら、あたしもおばさんって呼ぶなって言ってるうちの母デス」

「ふーん？ 自分の母親が自分の悪夢を見る夢を見るとか、何言ってるか分かってる？」

「わ、分かっているけど、よく分かってません。あと、その寝てるお母さんをおばさん達が心配して見てて――」

「そこまで言ってアリアは言葉が濁す。

「目をそらすな、そんなん弥生さんがいたって白状してるようなもんじゃない」

「はい、いました。なんかみんな若くて……今のわたし達くらい？ で、お母さんが変な夢みたー、みたい

な話を、弥生さんが二日酔いで聞いてました」

「あの人らしいわ。てか、そーいや弥生さん達ってこのガッコで知り合ってたか言ってたっけよっと」

そう言うところちゃん——オフエーリア・ハイヤ・マーシュ。弥生の父親違いの妹は座っていた机から降りて、ストラップやキーホルダーがじゃらじゃらとついた学校指定のカバンを肩にかける。

「ほら帰んぞアリア。てかバイト遅れたらねーさんにアリアが補習サボって寝てたって言うかんね？」

「うえっ!?! もうそんな時間!?! あと補習は終わってフォーちゃん待ってたら急に寝落ちしただけだから!」

アリアもリュック型のスクールバッグを肩にかけてオフエーリアを追いかける。

それは、いくつもある「今」の中から続いた明日。

鳥海有栖の娘、鳥海アリアがいる不確かな未来——。



ハピメア REGRET END & クリミナルボーダー  
W 予約キャンペーン特典・SS 文庫小説

---

『ハピメア・アンサートウン』

Happy nightMare - uncertain

---

2023年2月24日発行

著者 森崎亮人

発行 株式会社クリアブルーコミュニケーションズ

本書の無断複製〔コピー・スキャン・デジタル化等〕並び無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者等の第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であつても一切認められておりません。

連絡先

パープルソフトウェアサポートアドレス  
webmaster@purplesoftware.jp

『ハビメア Fragmentation Dream』から数年後、日本に戻ってきたが“とある事情”により気分最悪な弥生の下に、有子から「みんなには内緒で相談したい」というメッセージが届く。

しかし弥生の前に現れたのは有子ではなく、有子の身体の“有栖”だった。ありえない状況——そして夢の中で有子が迷い込んだという“暗い森”と、そこで出会った“透ではない”見知らぬ少年。

弥生をはじめとするハビメアヒロインたちが新たな謎を解き明かす、もう一つの“ありえた可能性”の物語。

ハビメア REGRET END・クリミナルボーダーW予約キャンペーン特典・SS文庫小説。

# HABIMEA REGRET END

ハビメア リグレット インド